修正七版

375.9
Yo19
資料室

中學日本文典 卷上

吉田彌平編

東京 光風館藏版

41838
教科書文庫
4
815
41-1923
20000
26419

教科書文庫
4
815
41-1923
2000026419

文部省檢定濟
大正十二年十一月十六日　中學校國語科教科書

中學日本文典

卷上

吉田彌平編

東京　光風館藏版

広島大学図書
2000026419

資料室
375.9
Y019

廣島大學圖書之印

廣島大學
教
26419
図書

緒言

一本書は中學校國語科に於ける文法の教科書にする目的で編纂したものである。

一本書は新に教授の實驗に基づいてこれまでの「中學日本文典」に適當な修正を加へ、且時代の進歩に顧みて、本文を口語體に改めたものである。

一本書は卷上に於て品詞に關する一般の知識を與へ、卷下に於て更に之を補說し、進んで文章に關する知識を與へる仕組にした。

一まづ平易な實例によつてその中に含まれてゐる國語の法則を歸納的に指示し、更に練習問題によつて演繹的に應用せしめる

方針を採つた。

一成るべく文語を本にして口語を對照し、文語法を習得すると共に一通り口語法に通ぜしめるやうにと務めた。

一本書は用例及び練習問題の選擇に意を用ひ、數種の中學校用國語讀本並に各專門學校入學試驗問題等の中から、最も實用に適切なものを採錄した。

大正十二年十月

中學 日本文典 卷上

目次

第一章　總說……一頁

第二章　品詞……三
名詞　代名詞　動詞　形容詞　助動詞　副詞
接續詞　感動詞　助詞

第三章　名詞の種類……六
名詞　數詞

第四章　代名詞の種類及び用法……九
人代名詞　物代名詞

第五章　動詞の活用その一……一三

四段活用　ら行變格活用　な行變格活用
上二段活用　下二段活用
第六章　動詞の活用その二……一九
上一段活用　下一段活用　か行變格活用
さ行變格活用　動詞活用の識別法
第七章　動詞の形……二四
な行變格活用の形
四段活用及びら行變格活用の形
か行・さ行兩變格活用の形
上二段活用及び下二段活用の形
上一段活用及び下一段活用の形
第八章　口語動詞の活用及び形……三〇
口語四段活用　口語か行變格活用
口語さ行變格活用　口語上一段活用

口語下一段活用
第九章　動詞の自他……三七
自動詞　他動詞
第十章　動詞の音便……四二
い音便　う音便　撥音便　促音便
第十一章　動詞の語尾の假名遣……四七
第十二章　形容詞の活用……五二
第一類の活用　第二類の活用
第十三章　形容詞の形附音便……五六
第十四章　助動詞の種類及び活用その一……六三
時の助動詞　打消の助動詞　推量の助動詞
受身の助動詞　可能の助動詞
第十五章　助動詞の種類及び活用その二……七〇

使役の助動詞　尊敬の助動詞　指定の助動詞
詠歎の助動詞　希望の助動詞　比說の助動詞
第十六章　口語助動詞の種類及び活用……七五
時の助動詞　打消の助動詞　推量の助動詞
受身の助動詞　可能の助動詞　使役の助動詞
尊敬の助動詞　指定の助動詞　希望の助動詞
第十七章　助動詞の形……八二
第十八章　副詞の用法……八六
第十九章　接續詞の種類及び用法……八九
並列累加の接續詞　選擇の接續詞　背反の接續詞
原因理由の接續詞
第二十章　感動詞の種類及び用法……九二
文の首につく感動詞　文の末につく感動詞

第二十一章　助詞の種類及び用法……九六
體言に添はる助詞
種々の語に添はる助詞
活用する語に添はる助詞

廣島大學圖書之印

中學日本文典　卷上

第一章　總說

音　人の肺臟から吐き出す空氣が聲帶又は口內の諸機關に觸れて發する聲を音といひ、音によつて我が思想を外にあらはしたものを

語　語又は言語といふ。

音字　音をあらはす一定の符號を音字といひ、意義を示す一定の符號を

意字　意字といひ、是等を總稱して文字といふ。

文字　◎假名は音字の一種で、漢字は意字の一種である。

假名

漢字

文　文字を用ひて或まとまつた思想を書き綴つたものを**文**又は**文章**といひ、一國の最多數の人の用ひる言語・文章をその國の**國語**・**國文**といふ。

國語　國文

我が國では、談話に用ひる語と文章に書く語とはやゝその形がちがふ。而して談話に用ひる語を**口語**といひ、文章に用ひる語を**文語**といふ。

口語　文語

口語及び文語には、それ〴〵一定の法則がある。之を**文法**といふ。

文法

◎時として、口語の法則を**口語法**又は**語法**といひ、文語の法則を**文語法**又は**文法**といふことがある。

語法

きれ〴〵の意味をあらはす一つ〳〵の語を**單語**といふ。

單語

單語は　名詞　代名詞　動詞　形容詞　助動詞　副詞　接續詞　感動詞　助詞

の九種に分れる。是等の一つ〳〵を**品詞**といふ。

品詞

第二章　品詞

名詞

名詞　山　川　櫻　鶯　富士山　豐臣秀吉　學問　勉强　などのやうに、事物の名をあらはす語をいふ。

代名詞

代名詞　われ　汝　彼　誰　これ　それ　こゝ　そこ　こち　そち　などのやうに、事物を指す語をいふ。

體言

◎名詞及び代名詞は、文の主となり、題目となる。この二品詞を併せて**體言**といふ。

動詞

動詞　讀む　書く　消ゆ　流る　有り　居り　などのやうに、事

物の動作又は存在をあらはす語をいふ。

形容詞

形容詞　白し　重し　厚し　美し　嬉し　正し　などのやうに事物の性質・情態をあらはす語をいふ。

◎動詞及び形容詞は、名詞・代名詞について何か語る語である。動詞及び形容詞を併せて用言といふ。

用言

助動詞

助動詞　「書かず。」「書きぬ。」「書くべし。」「書けり。」のず　ぬ　べ　し　り　のやうに、重に動詞に添うてその意味を助ける語をいふ。

副詞

副詞　「必ず來れ。」「頗るよし。」「大に喜ぶ。」「甚だ貴し。」の　必ず　頗る　大に　甚だ　などのやうに、おもに動詞・形容詞などに副うてその意味を限定する語をいふ。

接續詞

接續詞　「山又山。」「梅の花及び櫻の花。」「文を學び或は武を講ず。」の　又　及び　或は　などのやうに、語句のつなぎに用ひる語をいふ。

感動詞

感動詞　「あな嬉し。」「やよ待て。」「悲しいかな。」「行けや、人々。」のあな　やよ　かな　や　などのやうに、物に感動したときに發する語をいふ。

助詞

助詞　「櫻の花。」「誰か知らん。」「視れども見えず。」「淺くば渉れ。」のの　か　ども　ば　などのやうに、名詞・代名詞・動詞・形容詞等に添うて下の語句との關係をあらはす語をいふ。

◎助詞は助辭又はテニヲハなどといふこともある。

練習

次の文について名詞・形容詞・動詞・副詞及び感動詞を擇び出せ。

(イ)父母の恩は山より高く、海より深し。

(ロ)嗚呼忠臣楠子の墓。

(ハ)名も知らぬ小鳥、しきりに飛びかふ。
(ニ)朝には星を戴きて出で行き、夕には月を踏みて歸り來。
(ホ)土民はおもに農或は商を業とし、兼ねて漁獵に從ふ。
(ヘ)大禹は聖人なれども寸陰を惜みき。衆人に至りては當に分陰を惜むべし。
(ト)暮色は東山をこめ、叡山をめぐり、やう〳〵鴨川に襲ひ來れり。

名詞

第三章　名詞の種類

山　川　梅　鶯　机　硯　ビール　マッチ　等は物の名である。
富士山　大井川　伊藤博文　乃木希典　などは地名・人名である。
春　秋　心　夢　命　などは形のないものゝ名である。

働　遊　忠　孝　運動　集會　などは事の名である。

すべて事物の名をいふ語を**名詞**といふ。

固有名詞

◎富士山　乃木希典　のやうな地名・人名は、その山その人に限つた名で、他の山、他の人には通用せぬ。之を**固有名詞**といふことがある。

數詞

一　二　三つ　四つ　などは數量をあらはす語で、第五　六番　七つめ　などは順序をあらはす語である。かやうに數量又は順序をあらはす語を**數詞**といふ。數詞は名詞の一種である。

◎廣く數量をあらはすに　一個　二個　といひ、人の數をあらはすに　三人　四人　といひ、鳥の數をあらはすに　五羽　六羽　といひ、獸の數をあらはすに　一本　二本　といひ、平たいものゝ數をあらはすに　九頭　十頭　といひ、長い物の數をあらはすに　一本　三枚　四枚　といひ、二つ以上の同じものを一纏にしてあらはすに　「一對」　「二組」　「三ダ」

ース」などといふのも、亦數詞である。一尺　二呎　三升　四オンス　五匁　などのやうに度量衡をあらはす語、六圓　七弗　などのやうに金額をあらはす語も、亦數詞である。

練習

次の文から名詞を擇び出し、なほ固有名詞・數詞等があつたらそれをも示せ。

(イ)平原十里、麥は綠に、菜種は黃なり。

(ロ)勉强は幸福を生む母なり。

(ハ)須磨の海岸は松青く、砂白く、空氣も亦淸し。

(ニ)十で神童、十五で才子、二十過ぎては、唯の人。(ロ)

(ホ)京の五條の橋の上、大の男の辨慶は、長い薙刀ふりあげて、牛若目がけて斬りかゝる。(ロ)

第四章　代名詞の種類及び用法

代名詞の種類

人代名詞

われ　汝　彼　誰　のやうに人を指す代名詞を**人代名詞**といひ、

物代名詞

これ　それ　かれ　いづれ　のやうに事物を指し、こゝ　そこ　かしこ　いづこ　のやうに場所を指し、こち　そち　あち　いづち　のやうに方向を指す代名詞を**物代名詞**といふ。

人代名詞の稱　人代名詞は、話す人と指される人との關係によつて、**自稱・對稱・他稱・不定稱**の四種に分れる。

自稱

おのれ　私　僕　のやうに話す人自らを指すもの、**對稱**とは、汝

對稱

君　あなた(ロ)　おまへ(ロ)　のやうに相手を指すもの、**他稱**とは、

他稱

彼　あれ　あの人(ロ)　のやうに、自分でも相手でもない外の人を

不定稱

指すもの、**不定稱**とは、誰　某　どなた(口)　のやうに、それと定めぬ人、又はわからぬ人を指すものである。

◎自稱の　おのれ　われ　は時として對稱に用ひ、不定稱の　某　は、時として自稱に用ひる。

◎君　卿　を對稱に、私　僕　を自稱に用ひるなどは、名詞を代名詞に轉用したのである。

複數の人代名詞

◎われ〳〵　君たち　あなたがた　かれら　などいへば、指される人が二人以上であることを示す。即ち**複數の人代名詞**である。

物代名詞の稱　物代名詞は、話す人と指されるものとの關係によつて、之を**近稱・中稱・遠稱・不定稱**の四種に分ける。

近稱

近稱とは、こ　これ　こゝ　こなた(口、こちら)　こち(口、こつち)　のやうに、近くにある事物・地位・方向を指し、

中稱

中稱とは、そ　それ、そこ　そなた　(口、そちら)　そち(口、そつち)　のやうに、稍〻離れた事物・地位・方向を指し、

遠稱

遠稱とは、か　かれ　あ　あれ　あしこ(口、あそこ)　かしこ(口、あそこ)　かなた　あなた(口、あちら)　あち(口、あつち)　のやうに、離れてある事物・地位・方向を指すもの、

不定稱

不定稱とは　いづれ(口、どれ)　なに　いづこ(口、どこ)　いづかた(口、どちら)　いづち(口、どつち)　のやうに、その指す事物・地位・方向の定まらず、又は分らぬ事物・地位・方向を指すものをいふ。

◎こ　そ　は獨立しても用ひ、又　この　その　などのやうに、助詞　の　と續けても用ひる。か　あ　は、かの　あの　などのやうに、おもに助詞　の　と續けて用ひる。

◎こなた　こち　は自稱の人代名詞に、そこ　そなた　あなた　そち　は對稱の人代名詞に、どなた　は不定稱の人代名詞に轉用すること

がある。

練習

次の文から代名詞を擇び出し、且、その種類並に稱を示せ。

(イ)これはこゝに、それはそこに、かれはかしこに、そのまゝおけ。

(ロ)わが友はいづちに行きしか、かなたこなたたづぬれど見あたらず。

(ハ)「汝(なんぢ)は誰そ。そを何處にか負ひてゆく。」「聞召せ、背負ひ奉るは奴わが主と賴む乃木將軍の愛兒(マナゴ)なり。」

(ニ)あそこにある本はあなたの本でございますか。いゝえ、あの本は私の本ではございません。あれは多分太郎さんの本でございませう。(ロ)

(ホ)明治天皇は、われら國民に勅語を下し賜ひて、「朕爾臣民ト倶ニ拳拳服膺シテ咸厥德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ。」とのたまへり。

語幹
語尾
活用

第五章　動詞の活用　その一

動詞はその形が色々に變る。左の例を見よ。

咲(さ)
(あ段)…花さかず。　か
(い段)…花さきぬ。　き
(う段)…花さく。　く
(え段)…花さけ。　け

右の例のさのやうに變らぬ部分を語幹といひ、かきくけのやうに變る部分を語尾といひ、その變ることを活用といふ。

動詞の活用には、四段・ら行變格・な行變格・上二段・下二段・上一段・下一段・か行變格・さ行變格の九種ある。

四段活用　語尾が五十音圖のあいうえ四段に活用す

一四段活用

るものをいふ。前例の　咲く　がこれにあたる。書く　押す　育つ　思ふ　積む　釣る　漕ぐ　飛ぶ　などは、皆此の活用である。

◎是等の動詞は、その活用の行によつて、か行四段活用・さ行四段活用などといふ。

◎四段に活用するのは、か　さ　た　は　ま　ら　が　ば　の八行である。

◎あらゆる動詞の中で、四段活用に屬するものが最も多い。

ら行變格活用　ら行の四段に活用する動詞のうち、有り　居り　侍り　の三語をいふ。

〔例〕

ら（あ段）……望あらば言へ。
有り（い段）……天に日月あり。

二ら行變格活用

る（う段）……能ある鷹は爪をかくす。
れ（え段）……才はあれど、德はなし。

◎ら行變格の動詞は通常のら行四段の動詞に似てゐるが、文意の切れるところに左の相違があるのである。

少年魚を釣る。る で言ひ切る。ら行四段。
こゝに本あり。り で言ひ切る。ら行變格。

な行變格活用　五十音圖中な行の　あ　い　う　え　四段に活用し、且そのう段の音に　る　れ　の添はるものをいふ。

〔例〕

な（あ段）……夜更くれども往なず。
に（い段）……夜更けて往にたり。
ぬ（う段）……夜更けて往ぬ。
ぬる（え段）……夜更くれども往ぬることなし。

三な行變格活用

ぬれ……夜更けて往ぬれども、敢へて止めず。
ね（え段）　夜の更けぬうちに往ね。

◎な行變格は、う段の音に　る　れ　の添はる點が、通常の四段活用とちがふのである。

◎な行變格は　死ぬ　往ぬ　の二語だけである。

四上二段活用

上二段活用　五十音圖中　い　う　の二段に活用し、且、そのう段の音に　る　れ　の添はるものをいふ。

〔例〕

起き（い段）……彼は未だ起きず。
　く（う段）……余は既に起く。
　くる……遲く起くることなかれ。
　くれ……早く起くれば心地よし。

生く　朽つ　用ふ　試む　報ゆ　懲る　過ぐ　恥づ　延ぶ　な

五下二段活用

どは、何れも此の活用である。

◎此の段に活用するのは　か　た　は　ま　や　ら　が　だ　ば　の九行である。

下二段活用　五十音圖中　え　う　の二段に活用し、且、そのう段の音に　る　れ　の添はるものをいふ。

〔例〕

告げ（え段）……雞曉を告げぬ。
　ぐ（う段）……雞曉を告ぐ。
　ぐる……雞の曉を告ぐる聲勇ましし。
　ぐれ……雞曉を告ぐれば必ず起く。

得　避く　馳す　捨つ　尋ぬ　教ふ　褒む　覺ゆ　流る　植う　遂ぐ　交ず　出づ　弛ぶ　などは、皆此の活用である。

◎下二段活用の動詞は、五十音圖のすべての行にある。

◎得　はその語全體が變化する。

◎下二段活用の動詞の數は、四段活用の動詞につぐ。

次の文から動詞を擇び出し、且、その活用を示せ。

(イ)急がばまはれ。

(ロ)茶店あれども、客來らず。

(ハ)かばねは朽ちて骨となり、又は折れて霜結ぶ。

(ニ)言ふこと、爲すこと、皆道にかなへり。

(ホ)月落ち、烏啼きて、霜天に滿つ。

(ヘ)去年今夜清涼に侍りき。秋思の詩篇獨り腸を斷つ。

(ト)死ぬべき日に死なずば、死ぬるにまさる恥あらん。

六上一段活用

第六章　動詞の活用　その二

上一段活用　五十音圖中　い　の一段にのみ活用し、且、これに　る　れ　の添はるものをいふ。

〔例〕

「見」
- き（い段）……山をみず。
- きる……山をみる。
- きれ……山をみれば登りたし。

上一段活用の動詞は　着る　似る　煮る　干る　見る　惟みる　顧みる　鑑みる　試みる　射る　鑄る　居る　用ゐる　率ゐる　ぐらゐるのものである。

◎上一段に活用するのは　か　な　は　ま　や　わ　の六行である。

◎試みるは試む、用ゐるは用ふともいつて、上二段にも活用する。

七下一段活用

下一段活用　五十音圖中　え　の一段にのみ活用し、且、これにる　れ　の添はるものをいふ。

〔例〕

「蹴」
- け（え段）……ボールをけん。
- ける……ボールをける。
- けれ……ボールをければ、ゴールに入りぬ。

八か行變格活用

◎下一段活用は　蹴る　の一語だけである。

か行變格活用　語尾が五十音圖中、か行の　お　い　う　三段に活用し、且、そのう段の音に　る　れ　の添はるものをいふ。

〔例〕

こ（お段）……秋未だこず。

九さ行變格活用

「來」
- き（い段）……秋きぬ。
- く（う段）……秋く。
- くる……くる秋を待つ。
- くれ……秋くれば、木の葉散る。

◎か行變格は、たゞ　來　の一語だけである。

さ行變格活用　語尾が五十音圖中、さ行の　え　い　う　三段に活用し、且、そのう段の音に　る　れ　の添はるものをいふ。

〔例〕

「爲」
- せ（え段）……遠足をせん。
- し（い段）……遠足をしぬ。
- す（う段）……遠足をす。
- する……遠足をする人あり。
- すれ……遠足をすれども、汽車には乘らず。

◎さ行變格は　す（爲）　おはす（在す）　の二語だけである。

しかし此の　す　といふ動詞は、心す　罪す　論ず　運動す　勉强す　全くす　正しくす　などのやうに、名詞・形容詞などと結びついて熟語の動詞をいくらも作る。

動詞活用の識別法

動詞活用の識別法　上一段・下一段活用と變格の諸活用とは、語數が少いから、その動詞を記憶することがたやすく出來る。其の他は左の識別法によるがよい。

四段活用の識別

(イ)**四段活用**　書かず　言はず　のやうに、あ段の語尾に　ず　をつけて打消をあらはす。

上二段活用の識別

(ロ)**上二段活用**　起きず　老いず　のやうに、い段の語尾に　ず　をつけて打消をあらはす。

下二段活用の識別

(ハ)**下二段活用**　聞えず　寢ねず　のやうに、え段の語尾に　ず　をつけて打消をあらはす。

練習

次の文から動詞を擇み出し、且、その活用を示せ。

(イ)治にゐて亂を忘れず。
(ロ)うはさをすれば、影がさす。
(ハ)强者存して弱者滅び、强國榮えて弱國衰ふ。
(ニ)春は來れども、花咲かず。
(ホ)能はざるにあらず、せざるなり。
(ヘ)見渡せば、眺むれば、見れば、須磨の秋。
(ト)今日は來な、明日こよ。
(チ)その將を獲んには、その馬を射よ。

第七章　動詞の形

活用形

動詞の變化には、それ〴〵用ひ方のきまりがある。これを形といふ。

な行變格活用の形

一　な行變格の形

〔例〕

死ぬ

な……われ將に王事に死なんとす。
に……一門悉く王事に死に果てたり。
ぬ……潔く王事に死ぬ。
ぬる……王事に死ぬる武士。
ぬれ……死ぬれば萬事休す。
ね……潔く王事に死ね。

死な　は、多く事の未だ然らざることを假にいふ場合に用ひるから、未然形といひ、死に　は、多く用言に連なる場合に用ひるから、連用形といひ、死ぬ　は、多く文句の切れる場合に用ひるから、終止形といひ、死ぬる　は、多く體言に連なる場合に用ひるから、連體形といひ、死ぬれ　は、多く或條件の已に成立したことをいふ場合に用ひるから、已然形といひ、死ね　は、命令・希望の意を示すに用ひるから、命令形といふ。

未然形
連用形
終止形
連體形
已然形
命令形

◎六形の名稱は、その用ひ方の一部について便宜上名づけたもので、各段の用ひ方がこれで盡きてゐるのではない。「甲も死に、乙も死ぬ」の死に　は連用形であるが、言ひ方を中止して居るのみで、用言に連續せず、「死ぬべし。」の　死ぬ　は終止形であるが、終止しないで　べし　に連なるやうなものである。

二　四段及びら行變格の形

四段活用及びら行變格活用の形

三 か行さ行兩變格の形

〔例〕

降ふ
- ら（未然）雨降らんとす。
- り（連用）雨降りしきる。
- る（終止）雨降る。
- る（連體）雨降ることあり。
- れ（已然）雨降れば、地固まる。
- れ（命令）雨よ降れ。

有る
- ら（未然）功有らば賞せられん。
- り（連用）功有りて賞せらる。
- り（終止）旅順の役に功有り。
- る（連體）功有るものは賞せらる。
- れ（已然）功有れども賞せられず。
- れ（命令）功に相當する恩賞あれかし。

◎四段活用の動詞は、終止形と連體形とが同じ、語尾で、已然形と命令形とも亦同じ語尾である。

◎ら行變格活用の動詞は、連用形と終止形とが同じ語尾で、已然形と命令形とも亦同じ語尾である。

か行・さ行兩變格活用の形

〔例〕

「來くる」
- こ（未然）春はやがてこん。
- き（連用）春きぬ。
- く（終止）春く。
- くる（連體）くる春を待つ。
- くれ（已然）春くれど花咲かず。
- こよ（命令）春來よ。

「爲す」
- せ（未然）雪合戰をせば面白からん。
- し（連用）雪合戰をしはじむ。
- す（終止）雪合戰をす。
- する（連體）雪合戰をする子供。
- すれ（已然）雪合戰をすれば面白し。
- せよ（命令）雪合戰をせよ。

◎か行・さ行の兩變格及びな行變格の動詞は、各形ともその語尾がちがふ。命令形には何れも よ を含む。

四 上二段及び下二段の形

上二段活用及び下二段活用の形

〔例〕

起く
- き（未然）未だ起きず。
- き（連用）早く起き遲く寢ぬ。
- く（終止）早く起く。

受く
- け（未然）恩を受けば必ず報いよ。
- け（連用）恩を受けたり。
- く（終止）恩を受く。

くる（連體）遲く起くる事なし。
くれ（已然）早く起くれば快し。
きよ（命令）早く起きよ。

くる（連體）恩を受くる事あり。
くれ（已然）恩を受くれば必ず報ゆ。
けよ（命令）請ふ、余の寸志を受けよ。

◎上二段活用及び下二段活用の動詞は、未然形と連用形とが同じ語尾である。又命令形には何れも　よ　を含む。

上一段活用及び下一段活用の形

五上一段及び下一段の形

〔用〕

み（未然）花を上野にみん。
み（連用）花をみいだせり。
みる（終止）花をみる。
みる（連體）花をみる人あり。
みれ（已然）花をみれば心慰む。
みよ（命令）花をみよ。

「見」

け（未然）ボールをけず。
け（連用）ボールをけたり。
ける（終止）ボールをける。
ける（連體）ボールをける人あり。
けれ（已然）ボールをければこゝちよし。
けよ（命令）ボールをけよ。

「蹴」

◎上一段活用及び下一段活用は、未然形と連用形とが同じ語尾で、終止形と連體形とも亦同じ語尾である。又命令形は何れも　よ　を含む。

練習三

次の文の誤を正せ。

(イ) 約束を違ふ時は信用を失ふべし。
(ロ) 何事も自らして他人に任すことなし。
(ハ) 足の疲るを覺えず。
(ニ) 人の言ひ傳ふ所此の如し。

次の文から動詞を擇び出し、且、その活用及び形を示せ。

(イ) 來るものは拒まず、去るものは追はず。
(ロ) 夙に起き、夜に寢ねて、家業を勉勵す。
(ハ) なせばなる、なさねばならず、成るわざをならずとすつる人のはかなさ。

(ニ)心こゝにあらざれば、視れども見えず、聽けども聞えず、食へども其の味を知らず。

(ホ)人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。

(ヘ)降り暮す五月の空なれば、軒の玉水音は絶えせず、夜は衣を重ぬるまで冷かなり。

第八章　口語動詞の活用及び形

口語の動詞は文語の動詞より其の活用がよほど簡單になる。その種類も四段・か行變格・さ行變格・上一段・下一段の五種に過ぎぬ。

口語四段活用　文語の四段・ら行變格・な行變格の活用は、口語では

一口語四段活用

すべて四段活用となる。

活用	語幹	未然	連用	終止	連體	已然(文)假定(口)	命令
文 四段	成	ら	り	る	る	れ	れ
口 四段	成	ら	り	る	る	れ	れ
文 ら行變格	有	ら	り	り。	る	れ	れ
口 四段	有	ら	り	る。	る	れ	れ
文 な行變格	死	な	に	ぬる。	ぬる	ぬれ。	ね
口 四段	死	な	に	ぬ。	ぬ。	ね。	ね

人あり――人がある
死ぬる人―死ぬ人
死ぬれば―死ねば

即ち、文語ら行變格の終止形　有り　は口語では　有る　となつて四段活用に一致し、な行變格の連體形　死ぬる　は　死ぬ　となり、已然形　死ぬれ　は假定形　死ね　となつて、是亦四段活用に一致する。

假定形

◎文語動詞の已然形に當るところは、口語動詞では總べて假定の條件を示す意味となるから、假定形と名づける。

二口語か行變格活用

口語か行變格活用　文語の　終止形　く　は口語では　くる　となり、命令形　こよ　は　こい　となる。

文	口	活用語幹	未然連用	終止連體	已然(文)假定(口)	命令
か行變格「來」	こ	こ	き	く。	くる	くれ	こよ。
	き	き	く。	くる。	くる	くれ	こい。

人く――人がくる
早くこよ――早くこい

即ち口語ではか行變格活用も終止形と連體形とが共に同じ形になる。

三口語さ行變格活用

口語さ行變格活用　未然形と終止形とが文語さ行變格活用の動詞と少しちがふ。

文	口	活用語幹	未然連用	終止連體	已然(文)假定(口)	命令
さ行變格「爲」	せ	せ	し。せ。	す。	する	すれ	せよ
	し	し	し	する。	する	すれ	せよ

仕事をせず――仕事をせぬ／しない
仕事をす――仕事をする

即ち文語の未然形　せ　は口語では　せ　又は　し　となり、終止形　す　は　する　となる。

◎口語さ行變格の命令形の　せよ　は、しろ　せい　といふ處もある。

四口語上一段活用

口語上一段活用　文語の上一段・上二段の動詞は、口語では、すべて上一段活用となる。

文	口	活用語幹	未然連用	終止連體	已然(文)假定(口)	命令
上一段「見」	み	み	み	みる	みる	みれ	みよ
	み	み	みる	みる	みる	みれ	みよ

文	上二段	き	き	く。	くる。	くれ。	きよ
口	上一段	き	き	きる。	きる。	きれ。	きよ

起

早く起く——早く起きる
早く起くる人—早く起きる人
早く起くれば—早く起きれば

即ち文語上二段活用の終止形　起く、連體形　起くる　は、口語では共に　起きる　となり、已然形　起くれ　は　假定形　起きれ　となつて、全く上一段活用である。

◎文語の終止形　起く　を、口語で　起くる、連體形　起くる　已然形　起くれ　をそのまゝ　起くる　起くれ　といふ地方もあるが、普通には用ひない。

◎口語上一段の命令形を　見ろ　見い、起きろ　起きい　などといふところもある。

口語下一段活用　文語の下一段・下二段の動詞は、口語では、すべて下一段活用となる。

五　口語下一段活用

文	下一段	け	け	け	け	け	け	け。	けよ
口	下一段	け	け	け	け	け	け。	け。	けよ
文	下二段	け	け	け	け	け	く。	くる。	けよ
口	下一段	け	け	け	け	け	け。	け。	けよ

活用語幹「蹴」

活用語幹	未然	連用	終止	連體	已然(文)假定(口)	命令
受	け	け	ける	ける	けれ	けよ

数を受く——数を受ける
数を受くる人—数を受ける人
数を受くれば—数を受ければ

即ち文語下二段活用の終止形　受く、連體形　受くる　は、口語では共に　受ける　となり、已然形　受くれ　は　受けれ　となつて、全く下一段活用である。

◎文語の終止形　受く　を口語で　受くる、連體形　受くる　已然形　受くれ　をそのまゝ　受くる　受くれ　といふ地方もあるが、普通には用ひない。

◎口語上一段の命令形を　蹴い　蹴ろ　受けい　受けろ　などといふ

ところもある。

練習

次の文から動詞を擇び出し、且、その活用及び形を示せ。

(イ) 一艦でも出て來たら、目に物見せてくれるぞ。

(ロ) 少し下りると路は消えて、石ばかりごろ〳〵して居る。案内者は迷ひ始める、前途が心配でたまらなくなる。

(ハ) 兎角世の人は、事業の成功するまでには。はや根氣が盡きて疲れてしまふから、大事が出來ぬのだ。

(ニ) 世の學問に志す者はとかく低いところを經ないで、すぐに高いところへ登らうとする弊がある。それでは低いところにさへ届くことは出來ない。

さ行變格	(爲)	せ	し	す。	する	すれ	せよ
か行上二段	生	き	き	く	くる	くれ	きよ
が行上二段	過	ぎ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎよ
た行上二段	朽	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
だ行上二段	恥	ぢ	ぢ	づ	づる	づれ	ぢよ

さ行變格	(爲)	せ	し	する。	する	すれ	せよ
か行上一段	生	き	き	きる	きる	きれ	きよ
が行上一段	過	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ
た行上一段	朽	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ
だ行上一段	恥	ぢ	ぢ	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢよ

動詞活段對照表

文語

活用の種類	語幹の例	語尾 未然	連用	終止	連體	已然	命令
か行四段	書	か	き	く	く	け	け
が行四段	漕	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
さ行四段	押	さ	し	す	す	せ	せ
た行四段	育	た	ち	つ	つ	て	て
は行四段	思	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
ば行四段	飛	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
ま行四段	積	ま	み	む	む	め	め
ら行四段	釣	ら	り	る	る	れ	れ
ら行四段	有	ら	り	り	る	れ	れ
な行變格	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
か行變格	(來)	こ	き	く	くる	くれ	こよ
さ行變格	(爲)	せ	し	す	する	すれ	せよ
か行上二段	生	き	き	くる	くる	くれ	きよ
が行上二段	過	ぎ	ぎ	ぐる	ぐる	ぐれ	ぎよ
た行上二段	朽	ち	ち	つる	つる	つれ	ちよ
だ行上二段	恥	ぢ	ぢ	づる	づる	づれ	ぢよ
は行上二段	用	ひ	ひ	ふる	ふる	ふれ	ひよ
ば行上二段	延	び	び	ぶる	ぶる	ぶれ	びよ
ま行上二段	試	み	み	むる	むる	むれ	みよ
や行上二段	報	い	い	ゆる	ゆる	ゆれ	いよ
ら行上二段	懲	り	り	るゝ	る	れ	りよ
か行上一段	(着)	き	き	きる	きる	きれ	きよ
な行上一段	(煮)	に	に	にる	にる	にれ	によ
は行上一段	(干)	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
ま行上一段	(見)	み	み	みる	みる	みれ	みよ

口語

活用の種類	語幹の例	語尾 未然	連用	終止	連體	假定	命令
か行四段	書	か	き	く	く	け	け
が行四段	漕	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
さ行四段	押	さ	し	す	す	せ	せ
た行四段	育	た	ち	つ	つ	て	て
は行四段	思	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
ば行四段	飛	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
ま行四段	積	ま	み	む	む	め	め
ら行四段	釣	ら	り	る	る	れ	れ
ら行四段	有	ら	り	る	る	れ	れ
な行四段	死	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね
か行變格	(來)	こ	き	くる	くる	くれ	こい
さ行變格	(爲)	せ	し	する	する	すれ	せよ
か行上一段	生	き	き	きる	きる	きれ	きよ
が行上一段	過	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ
た行上一段	朽	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ
だ行上一段	恥	ぢ	ぢ	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢよ
は行上一段	用	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
ば行上一段	延	び	び	びる	びる	びれ	びよ
ま行上一段	試	み	み	みる	みる	みれ	みよ
や行上一段	報	い	い	いる	いる	いれ	いよ
ら行上一段	懲	り	り	りる	りる	りれ	りよ
か行上一段	(着)	き	き	きる	きる	きれ	きよ
な行上一段	(煮)	に	に	にる	にる	にれ	によ
は行上一段	(干)	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
ま行上一段	(見)	み	み	みる	みる	みれ	みよ

動詞活段對照表

文語

活用の種類	語幹の例	語尾 將然	連用	終止	連體	已然	命令
か行四段	書	か	き	く	く	け	け
が行四段	漕	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
さ行四段	押	さ	し	す	す	せ	せ
た行四段	育	た	ち	つ	つ	て	て
は行四段	思	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
ば行四段	飛	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
ま行四段	積	ま	み	む	む	め	め
ら行四段	釣	ら	り	る	る	れ	れ
ら行變格	有	ら	り	り	る	れ	れ
な行變格	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
か行變格	來	こ	き	く	くる	くれ	こよ
さ行變格	爲	せ	し	す	する	すれ	せよ
か行上二段	生	き	き	く	くる	くれ	きよ
が行上二段	過	ぎ	ぎ	ぐ	ぐる	ぐれ	ぎよ
た行上二段	朽	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ
だ行上二段	恥	ぢ	ぢ	づ	づる	づれ	ぢよ
は行上二段	用	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひよ
ば行上二段	延	び	び	ぶ	ぶる	ぶれ	びよ
ま行上二段	試	み	み	む	むる	むれ	みよ
や行上二段	報	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ
ら行上二段	懲	り	り	る	るゝ	れる	りよ
か行上一段	着	き	き	きる	きる	きれ	きよ
な行上一段	煮	に	に	にる	にる	にれ	によ
は行上一段	干	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
ま行上一段	見	み	み	みる	みる	みれ	みよ
や行上一段	射	い	い	いる	いる	いれ	いよ
わ行上一段	居	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ
あ行下二段	得	え	え	える	える	えれ	えよ
か行下二段	避	け	け	ける	ける	けれ	けよ
が行下二段	告	げ	げ	げる	げる	げれ	げよ
さ行下二段	馳	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
ざ行下二段	交	ぜ	ぜ	ずる	ずる	ずれ	ぜよ
た行下二段	捨	て	て	つる	つる	つれ	てよ
だ行下二段	出	で	で	づる	づる	づれ	でよ
な行下二段	尋	ね	ね	ぬる	ぬる	ぬれ	ねよ
は行下二段	教	へ	へ	ふる	ふる	ふれ	へよ
ば行下二段	弛	べ	べ	ぶる	ぶる	ぶれ	べよ
ま行下二段	褒	め	め	むる	むる	むれ	めよ
や行下二段	覺	え	え	ゆる	ゆる	ゆれ	えよ
ら行下二段	流	れ	れ	るる	るゝ	れる	れよ
わ行下二段	植	ゑ	ゑ	うる	うる	うれ	ゑよ
か行下一段	蹴	け	け	ける	ける	けれ	けよ

口語

活用の種類	語幹の例	語尾 將然	連用	終止	連體	假定	命令
か行四段	書	か	き	く	く	け	け
が行四段	漕	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
さ行四段	押	さ	し	す	す	せ	せ
た行四段	育	た	ち	つ	つ	て	て
は行四段	思	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
ば行四段	飛	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
ま行四段	積	ま	み	む	む	め	め
ら行四段	釣	ら	り	る	る	れ	れ
ら行四段	有	ら	り	り	る	れ	れ
な行四段	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
か行變格	來	こ	き	くる	くる	くれ	こい
さ行變格	爲	せ	し	する	する	すれ	せよ
か行上一段	生	き	き	きる	きる	きれ	きよ
が行上一段	過	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ
た行上一段	朽	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ
だ行上一段	恥	ぢ	ぢ	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢよ
は行上一段	用	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
ば行上一段	延	び	び	びる	びる	びれ	びよ
ま行上一段	試	み	み	みる	みる	みれ	みよ
や行上一段	報	い	い	いる	いる	いれ	いよ
ら行上一段	懲	り	り	りる	りる	りれ	りよ
か行上一段	着	き	き	きる	きる	きれ	きよ
な行上一段	煮	に	に	にる	にる	にれ	によ
は行上一段	干	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
ま行上一段	見	み	み	みる	みる	みれ	みよ
や行上一段	射	い	い	いる	いる	いれ	いよ
わ行上一段	居	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ
あ行下一段	得	え	え	える	える	えれ	えよ
か行下一段	避	け	け	ける	ける	けれ	けよ
が行下一段	告	げ	げ	げる	げる	げれ	げよ
さ行下一段	馳	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
ざ行下一段	交	ぜ	ぜ	ずる	ずる	ずれ	ぜよ
た行下一段	捨	て	て	つる	つる	つれ	てよ
だ行下一段	出	で	で	づる	づる	づれ	でよ
な行下一段	尋	ね	ね	ぬる	ぬる	ぬれ	ねよ
は行下一段	教	へ	へ	ふる	ふる	ふれ	へよ
ば行下一段	弛	べ	べ	ぶる	ぶる	ぶれ	べよ
ま行下一段	褒	め	め	むる	むる	むれ	めよ
や行下一段	覺	え	え	ゆる	ゆる	ゆれ	えよ
ら行下一段	流	れ	れ	るる	るゝ	れる	れよ
わ行下一段	植	ゑ	ゑ	うる	うる	うれ	ゑよ
か行下一段	蹴	け	け	ける	ける	けれ	けよ

第九章　動詞の自他

自動詞

動詞は、その性質上之を自動詞と他動詞とに分ける。自動詞とは、「火消ゆ。」「水流る。」の　消ゆ　流る　のやうに、動作の主たる語即ち　火　水　等の外、別に動作を受ける目的の語を要しない動詞をいふ。

他動詞

他動詞とは、「少女鞠をつく。」「少年凧を揚ぐ。」の　つく　揚ぐ　のやうに、動作の主たる　少女　少年　の外に、動作を受ける目的の語、即ち　鞠　凧　等を加へて、文意の始めて通ずる動詞をいふ。

◎他動詞は多く「何々を」といふ語を受ける。但し、「文(を)讀む窓。」「馬(を)繫ぐべからず。」のやうに、を　を略することもある。又、稀には「空を

渡る。「門を入る。」の　渡る　入る　のやうに、自動詞でありながら　を　を受けるものもある。

動詞には自動詞のみで之に對する他動詞のないものがあり、他動詞のみで之に對する自動詞のないものがある。又、自他共にその語形の全く同じものもあり、自他によつてその活用のちがふものもある。

性は用形のケの動詞

一　自動詞のみの動詞

自動詞のみの動詞

眠る　有り　死ぬ　來る　など。

二　他動詞のみの動詞

他動詞のみの動詞

打つ　殺す　投ぐ　送る　など。

三　自他同形の動詞

自他同形の動詞

吹く（四段）……風、吹く。（自）　牧童、笛を吹く。（他）

四　語のもとが同じで自他の活用のちがふ動詞

閉づ（上二段）……門、閉づ。（自）　下女、門を閉づ。（他）

垂る（下二段）……尾、垂る。（自）　犬、尾を垂る。（他）

語幹

語のもとが同じで、自他の活用のちがふ動詞

育つ（四段）……子、育つ。（自）

育つ（下二段）……母、子を育つ。（他）

足る（四段）……衣食足る。（自）

足す（四段）……仁君、民の衣食を足す。（他）

見ゆ（下二段）……月、見ゆ。（自）

見る（上一段）……少年、月を見る。（他）

冷ゆ（下二段）……水、冷ゆ。（自）

冷す（サ行四段）……下女水を冷す。（他）

盡く（カ行上二段）……糧食、盡く。（自）

盡す（サ行四段）……兵士、糧食を食ひ盡す。（他）

落つ（タ行上二段）……木の葉、落つ。（自）

落す（サ行四段）……風、木の葉を落す。（他）

練習

次の文から動詞を擇み出し、且、その自他を分けよ。

（イ）人若うしては學ばんことを願ひ、老いては教へんことを欲す。

（ロ）身を立て、道を行ひ、名を後世に揚げて父母を顯はすは、孝の終なり。

（ハ）花咲く春のあけぼのを、はやとく起きて見よかしと、鳴く鶯も心して、人の夢をぞさましける。

次の動詞に自他の誤があつたら正せ。

（イ）試驗を終らば一先歸らん。

（ロ）庭の趣は年と共に加へたり。

（ハ）日を暮れ、夜を明かす。

（ニ）何事をも爲さで一日を過ぎけり。

（ホ）船を泛びて、月を中流に賞す。

（ヘ）不毛の地開けて樹木を植う。

次の諸動詞の自他を分けよ。又活用によつて自他のちがふものがあつたら、一々それを示せ。

解く。照る。寄す。生ゆ。沸す。立つ。倒る。起す。及す。

伸ぶ。止る。

第十章　動詞の音便

四段に活用する動詞の語尾が「て」（口語では、「た」「て」「たり」）につゞく時には、發音の便宜によつて、他の音に轉ずることがある。之を動詞の音便といふ。

動詞の音便は左の如く四種ある。

一　い音便　「い」音便　か行及びが行四段活用の語尾の「き」「ぎ」が「い」に轉ずるものをいふ。

〔例〕

開き て……（文）　開い て
開き た り……（口）　開い た り

脫ぎ て……（文）　脫い で
脫ぎ だ り……（口）　脫い だ り

◎「ぎ」が「い」音便に轉ずるときは、次に來る「て」「たり」「はだ」「だり」と濁る。

◎「差して」が「差いて」となるやうに、稀にさ行四段活用の語尾の「し」が「い」に轉ずることもある。

◎口語で「差いて」「起いて」などいふ處もあるけれど、用ひないがよい。

◎「聞ひて」「脫ゐで」などと書き誤つてはならぬ。

二　う音便　「う」音便　は行四段活用の語尾の「ひ」が「う」に轉ずるものをいふ。

〔例〕

問ひて……（問う（たてたり）（口））（文）

◎「問ふて」などと書き誤つてはならぬ。

撥音便　な行・ば行・ま行四段活用動詞の語尾の　に　び　み　が撥音　ん　に轉ずるものをいふ。

〔例〕

死にて……（死ん（だでだり）（口））（文）

呼びて……（呼ん（だでだり）（口））（文）

三撥音便

讀みて……（讀ん（だでだり）（口））（文）

◎に　び　み　が撥音便に轉ずるときには、次に來る　た　て　たり　は　だ　で　だり　と濁る。

促音便　た行・は行・ら行四段活用動詞及びら行變格活用動詞の語尾の　ち　ひ　り　が促音に轉ずるものをいふ。

〔例〕

打ちて……（打つ（たてたり）（口））（文）

從ひて……（從つ（たてたり）（口））（文）

四促音便

取りて　有……

取つて　有（文）

取つ（たて）　有（たり）（口）

練習

次の文の中の動詞をなるたけ音便に改めよ。

（イ）みづから請ひて義勇兵となる。

（ロ）勝ちて冑の緒をしめよ。

（ハ）凝りては百錬の鐵となり、鋭利鑿を斷つべし。

（ニ）進みては忠を盡さんことを思ひ、退きては君の過を補はんことを思ふ。

（ホ）朝には星を戴きて出で行き、夕には月を踏みて歸り來。

次の文の假名遣に誤があつたら正せ。

（イ）溪に沿ふて進む。

（ロ）敵は終に國を割いて和を請ふた。

（ハ）つゝしむで貴君の健康を祝せん。

（ニ）仰いで天に愧ぢず。

（ホ）良雄は田園を買うて永住の地となさんとて、山科の里を訪ふこ

（ヘ）這う這うの體で逃げ込むだ。（口）

（ト）強あて飲食をすゝめるものでない。（口）

第十一章　動詞の語尾の假名遣

思ひて　報いて　聞いて　率ゐて

與ふ　思ふ　思うて

誣ふ　老ゆ　餓う

動詞の語尾の假名遣

答へず　見えず　植ゑず
出づ　交ず

右の例のやうに動詞の語尾の　ひ　い　ゐ、ふ　う、ふ　ゆ　う、へ　え　ゑ、づ　ず　などの假名は、發音が同じやうに聞えるため、互に紛れ易い。

動詞の語尾の假名遣を正しくするには、次の諸法によるがよい。

一、その動詞の活用を明かにすること。

例へば　堪　が、ば行の下二段、絶　が、や行の下二段に活用することを知つたならば、すぐに　堪え　堪ゆ　は　堪へ　堪ふ　の誤であること、絶へ　絶ふ　は　絶え　絶ゆ　の誤であることがわかる類である。

二、少い方の活用並に假名遣を記憶して他の多い方を推定すること。

例へば、交ず　が、ざ行下二段活用の唯一の動詞であることを記憶すれば、その他の　出づ　詣づ　撫づ　秀づ　ぬきんづ　等は、何れも皆だ行下二段活用であることを推定することが出來る類である。

三、本來の活用と音便との別を明かにすること。

例へば、問ひて　の　問ひ　は、は行四段本來の活用で、説いて　の　説い　は、か行四段活用　説き　のい音便であることを知つたならば、問ひて　説いて　の假名遣を誤ることのない類である。

今語尾の假名遣を誤り易い動詞の重なものを左に示さう。

四段活用　四段活用には、は行があつてわ行はない。
買ふ　思ふ　問ふ　叶ふ　などのやうに、わ行四段に聞えるものは、一切は行四段活用である。

上二段活用　此の活用で誤り易いのは、だ行・は行・や行の三活用で

ある。今その重なものを左に示さう。

だ行上二段……怖・綴・閉・恥・攀　ぢ　づ　づる　づれ

◎ざ行上二段活用はない。

は行上二段……生・戀・强・誣・用　ひ　ふ　ふる　ふれ

や行上二段……老・悔・報・酬　い　ゆ　ゆる　ゆれ

◎わ行上二段活用はない。

下二段活用　此の活用で誤り易いのは、あ行・ざ行・だ行・は行・や行・わ行の諸活用である。今その重なものを左に示さう。

ざ行下二段……交　ぜ　ず　ずる　ずれ

だ行下二段……出・撫・擢・秀・詣・愛　で　づ　づる　づれ

や行下二段……癒・覺・消・聞・肥・越・凍・冴・榮・聳・絶・斷・生・冷・殖・吠・謁・見・燃・萌　え　ゆ　ゆる　ゆれ

わ行下二段……植・栽・餓・飢・据・忍　う　うる　うれ

◎下二段活用の中は行・や行・わ行に比べればその數が頗る多くて八十餘語ある。故に　や行　わ行　に屬する重な語を記憶し、その他は大抵　は行　だと心得るがよい。

練習

次の文に假名遣の誤があつたら之を正せ。

(イ) 笑ふて答へず。

(ロ) 百年の計は德を樹ゆるにあり。

(ハ) 恩に報ゆることを知らぬ人は、人非人なり。

(ニ) 負ぶた子に教へられて淺瀨を渡る。(ロ)

(ホ) 汝自ら爲し得ざることは之を人に强ゆべからず。

(ヘ) 夏休み家戀ひ來れば坂を出でて家の森見ゆ、わが家の森。

(ト) 艱苦に堪へて年月を過し、絶えて憂悶の色なし。

(チ) 恥じて能く改め、覺へて忘れず。
(リ) 饑き凍えようとも、武士の體面を傷けまい。(ロ)
(ヌ) 我が言ふ事を用いずば、後に悔ふとも及ばじ。
(ル) 砲臺を構え、大砲を据へつく。
(ヲ) 夜ふけ、月冴えて、犬の吠ゆる聲しきりに聞えけり。

形容詞の活用

第十二章　形容詞の活用

高き し く
け れ

山高く、水深し。
山高し。
高き山に登る。
山高ければ、眺望に富む。

語幹
語尾
活用

一第一類の形容詞

右のごとく形容詞も亦その語の下部が變化する。而してたかのやうに變化しない部分を語幹といひ、く し き けれのやうに變化する部分を語尾といひ、その變化することを活用といふ。

形容詞の活用には左の二類ある。

第一類の活用　高し　暑し　重し　などのやうに、語幹の最後の音が し　又は　じ　でなく、且、語尾が く　し　き　けれ　と活用するものをいふ。

語幹例	語尾
高	く
暑	し
重	き
	けれ

二 第二類の形容詞

第二類の活用　美し　同じ　などのやうに、語幹の最後の音が し　又は　じ　で、語尾が　く　き　けれ　とだけ活用し、し の語尾を缺くものをいふ。

語幹例	語尾		
美し	く	き	けれ
同じ	○		

ロ 語形容詞の活用

口語では、形容詞は第一類と第二類との別なく、左の表のやうに く　い　けれ　と活用する。

語幹例	語尾		
高	く	い	けれ
美し			

練習

次の文から形容詞を擇び出し、且、その活用を示せ。

(イ) あなられし、よろこばし。
(ロ) 山けはしく、水青く、松高く、沙白し。
(ハ) 義は泰山より重く、死は鴻毛より輕し。
(ニ) 家は貧しけれど、慈悲の心いと篤し。
(ホ) 遠き慮なきものは、必ず近き憂あり。
(ヘ) 都會は物價貴ければ出費多く、交際繁ければうるさきこと多し。
(ト) 旅行はおもしろい事も多いが、つらい事も少くない。(ロ)
(チ) 冬の風は寒いが、夏の風は涼しく、春の月は近く見えるが、秋の月は遠く眺められる。(ロ)
(リ) 日はかん〳〵と烈しく照りつけて、まばゆくてたまらないが、空

はどこまでも秋らしく澄んでゐた。（日）

第十三章　形容詞の形附音便

形容詞には未然・連用・終止・連體・已然の五形がある。

- 未然形
  - 山高くば、眺望よからん。
  - 心正しくば、人に敬せられん。
- 連用形
  - 山高く聳ゆ。
  - 心を正しくもつ。
- 終止形
  - 山高し。
  - 心正し。

- 連體形
  - 高き山を越ゆ。
  - 心正しき人を敬す。
- 已然形
  - 山高ければ、眺望よし。
  - 心正しければ、人に敬せらる。

活用語幹例	語尾 未然	連用	終止	連體	已然
第一類　高	く	く	し	き	けれ
第二類　正し	く	く	○	き	けれ

◎形容詞の未然形と連用形とは同形である。

◎形容詞の連用形はまた中止の意に用ひる。「山高く、水深し。」「心正しく情厚し。」の　高く　正しく　は、卽ち此の例である。

◎第二類形容詞の終止形には語尾がなく、語幹そのまゝが終止形になる。

◎形容詞の連體形は、時として次に來る體言を省略することがある。「善

き（人を賞し、惡しき（人を罰す。」の　善き　惡しき　は此の例である。

◎形容詞には命令形がない。

形容詞と動詞ありとの結合

形容詞の連用形は動詞　あり　と結合して、ら行變格活用となる。

〔例〕

高く（か）あら　高く（か）あり　高く（か）ある　高く（か）あれ

正しく（か）あら　正しく（か）あり　正しく（か）ある　正しく（か）あれ

形容詞と動詞すとの結合

形容詞の連用形は又、動詞　す　と結びついて、さ行變格活用となることがある。

〔例〕

し　せ

し　せ

形容詞のう音便

高く＝す　する　すれ

正しく＝す　する　すれ

此の　く　は又、う音便で　う　に轉ずることがある。

〔例〕

高う　す　する　すれ　し　せ

正しう　す　する　すれ　し　せ

形容詞のい音便

形容詞連體形の語尾　き　は又い音便で　い　に轉ずることがある。

〔例〕

善きかな。……善いかな。

悲しきかな。……悲しいかな。

口語形容詞の形

口語では、「山が高い。」（終止）「高い山。」（連體）「心が正しい。」（終止）「正しい心。」（連體）のやうに、終止・連體の二形は同じ形になる。從つて、第一類・第二類の區別が全くない。

語幹例	語尾 未然	連用	終止	連體	已然（文）假定（口）
高（文）	く	く	し。	き。	けれ
高（口）	く	く	い。	い。	けれ
正し（文）	く	く	○。	き。	けれ
正し（口）	く	く	い。	い。	けれ

練習

次の文の誤を正せ。

（イ）任重ふして道遠し。

（ロ）善ひかな、汝の言や。

（ハ）人を笑ふて喜ぶはあしゝ。

（ニ）貴賓の來臨を辱ふす。

（ホ）ひもじゐときにまづひものはない。（ロ）

（ヘ）よふこそお出で下さいまして、有りがとう存じます。（ロ）

（ト）わるいことはせぬがよろしゝございます。（ロ）

次の文から、形容詞を擇び出し、且、その活用及び形を示せ。

（イ）早く成るものは破れ易く、遲く成るものは破れ難し。

（ロ）あやにたふときすめらぎの、あやにかしこきすめらぎの、あやにたふとくかしこくも下し賜へり、大御言。

（ハ）櫻の花は空の青く水の清い日本の風土に最もよく釣合つて、深

山市中どこにあつても皆よろしい。（ロ）

（ニ）寄附金はその金額の多きと少きとによらず、志の深きこそ何よりも嬉しけれ。

（ホ）世間は年中いそがしく、さわがしく、街路は朝に晩に雜沓す。都會が衞生上に宜しからざるは明かなり。

（ヘ）むかふの岡の深い森のわきに見えるのは我が家である。土地も高く、家も高いから、遠いところまで見渡すことが出來て、景色がまことにうるはしい。（ロ）

（ト）低き家、狹き町、淋しき松繩手、丈高き稻の穗、鼻の先に並びたる連山、をさなき頃より見なれたる一軒家、皆莞爾として我を迎ふるが如く、何れなつかしからぬはなし。

第十四章　助動詞の種類及び活用その一

助動詞の種類

助動詞は重に動詞に添うて其の意味を助けるものであるけれども、又他の助動詞に添ふこともあり、稀には名詞・代名詞・助詞に添ふこともある。今其の意義によつて助動詞を時・打消・推量・受身・可能・使役・尊敬・指定・詠歎・希望・比説の十一種に大別する。

一時の助動詞

時の助動詞　動作の行はれる時を示すもので、これに過去・未來・完了の三種ある。

過去

過去の助動詞は、き　けり　の二語で、動作の今から前に起つたことを示し、

未來

未來の助動詞は　む　の一語で、動作の今から後に起るべきことを示し、

完了

完了の助動詞は　つ　ぬ　たり　り　の四語

で、動作の已に終つた意を示す。

〔例〕

過去……昨日、大雪降り{き。(き　し　しか)／けり。(けり　ける　けれ)}

未來……明日、雪降らむ。(む　め)

完了{風、樹を偃しつ。(て　つ　つる　つれ　てよ)／雨止み{ぬ。(な　に　ぬ　ぬる　ぬれ　ね)／たり。(たら　たり　たる　たれ)}／雨止めり。(ら　り　る　れ)}

◎動詞の時は過去・現在・未來の三つに分れ、これにそれ〴〵完了の時を加へて六つとなる。而して現在の時は別に動詞を用ひず、動詞そのまゝであらはされる。

◎たり　り　は「花咲きたり」「我が宿に大雪降れり。」などのやうに用

進行的現在
繼續的現在

ひて、動作の繼續進行する意をあらはすことがある。之を**進行的現在**又は**繼續的現在**といふ。

◎「水は低きに就く。」「雨降つて地固まる。」のやうに眞理・習慣等をあらはすには、現在の形を用ひる。これを**恆の時**ともいふ。

◎助動詞の　む　は、今では　ん　と發音し、從つて通例　ん　と書く。

二打消の助動詞

打消の助動詞　ず　ざり　じ　まじ　のやうに動作を否定するものをいふ。

花見に行か{ず。(ず　ぬ　ね)／ざりき。(ざら　ざり　ざる　ざれ)／じ。(活用せぬ)}

花見に行くまじ。(まじく　まじ　まじき　まじけれ)

◎じ　まじ　は推量して否定する意味である。

三推量の助動詞

推量の助動詞　らむ　らし　べし　べかり　めり　む　まし　けむ　のやうに事實を推量する意に用ひるものをいふ。

雪降る　らむ。（らむ　らめ）
らし。（活用せぬ）
べし。（べく　べし　べき　べけれ）
べかりき。（べから　べかり　べかる　べかれ）
めり。（めり　める　めれ）

雪降ら　む。（む　め）
まし。（まし　ましか）

雪降りけむ。（けむ　けめ）

◎けむ　は過去の事實を推量する意味である。

◎今では　らむ　は　らん、むは　ん、けむ　は　けん　と發音し從つて、通例　らん　ん　けん　と書く。

四受身の助動詞

受身の助動詞　次の例の　る　らる　のやうに、動作を他よりしかけられる意を示すものをいふ。

太郎、犬に嚙まる。（れ　る　るゝ　るれ　れよ）
次郎、馬に蹴らる。（られ　らる　らるゝ　られる　られよ）

五可能の助動詞

可能の助動詞　次の例の　る　らる　べし　べかり　のやうに、そのものゝ力でなし得る意を示すものをいふ。

一時間に一里は走らる。（れ　る　るゝ　るれ）
此の問には我も答へらる。（られ　らる　らるゝ　られる）
千引の岩もくだくべし。（べく　べし　べき　べけれ）
美しさ名狀すべからず。（べから　べかり　べかる　べかれ）

◎る　らる　の活用は受身の　る　らる　と同じで、べし　べかり　の活用は推量の　べし　べかり　と同じである。

べしの用法

◎べし　は推量・可能の外、「子は親に孝なるべし。」のやうに、當然の意に用ひることがある。「明日出頭すべし。」のやうに、命令の意に用ひることがある。又、「今後斷じて復びせざるべし。」のやうに、斷言の意に用ひることもある。

◎る　らる　は、「子の行末思はる。」「母上の事のみ案ぜらる。」のやうに、動作が自ら起つて止め難き意に用ひることがある。かやうな場合には之を自發の助動詞といふ。

自發の助動詞

練習

次の文の中の　べし　の意味を説明せよ。

(イ)油盡くれば火は消ゆべし。
(ロ)風起らば、雨やむべし。
(ハ)必ず參上仕るべし。
(ニ)三尺の秋水鐵をも斷つべし。

(ホ)講堂に參集すべし。

次の傍線ある語の意義・用法を明かにせよ。

(イ)歩まば歩まれしを、人に勸められて已むを得ず車に乘れり。
(ロ)捨てられし兒の心の中まで思ひやられて、あはれに感ぜらる。

次の文から既に學んだ助動詞を擇び出し、且、之を類別せよ。

(イ)いかになりたりけん、その終を知らず。
(ロ)朝は水澄めれば、底の眞砂も數へつべし。
(ハ)親に孝を盡すべし。主人は大切にすべきものなり。人のものは取らぬものなり。無理・非道は行ふべからず。
(ニ)村上彦四郎、大塔宮の御前に參つて申しけるは、味方の氣の疲れ候ひぬれば、この城にて功を立てんこと今は叶はじと覺え候。敵の勢を餘所へ廻し候はぬ前に一先落ちて御覽あるべしと存

じ候。

(ホ)朝餐に列なれる人の、一人も缺けず、一日の務を終へて集りたる、嬉しからずといはんや。

(ヘ)この子利根こそ生れつきたらめ、なほ幼くしてその氣根の事も測り難く、家富めりとも見えねば、黄金の事心得られず。

(ト)さてもこの度は辛き命生きのびて各方にも對面することゝなりぬとて、飛脚はありし次第を委しく語れり。

第十五章　助動詞の種類及び活用　その二

使役の助動詞　次の例の　す　さす　しむ　のやうに、他のものに動作をさせる意を示すものをいふ。

六 使役の助動詞

左官に壁を塗らす。（せ　す　する　すれ　せよ）

大工に家を建てさす。（しめ　しむ　しむる　しむれ　しめよ）

（させ　さす　さする　さすれ　させよ）

（しめ　しむ　しむる　しむれ　しめよ）

尊敬の助動詞　次の例の　る　らる　す　さす　しむ　のやうに他の動作を敬ふ意を示すものをいふ。

兄上は親類のうちに赴かる。

主人は今朝旅行先より歸宅せらる。

皇子殿下には學習院に御通學あらせらる。

皇太子殿下には北海道に行啓せさせたまふ。

天皇陛下には大觀艦式に臨ましめたまひき。

◎る　らる　の活用は、受身・可能の　る　らる　に同じで、せ　させ

七 尊敬の助動詞

しめ　の活用は、使役の　せ　させ　しめ　に同じである。

◎尊敬の　せ　させ　しめ　は單獨に用ひることなく、通例尊敬の助動詞　らる　又は動詞　たまふ　と結合して用ひる。

八指定の助動詞

指定の助動詞　次の例の　なり　たり　のやうに、事物を指定する意を示すものをいふ。

人は萬物の靈なり。（なら　なり　なる　なれ）

我は我たり。（たら　たり　たる　たれ）

◎指定の助動詞は名詞・代名詞につゞくのが常である。

◎「運動もするなり」。「それがよきなり」など用言の連體形の下につくのは其の間に名詞が略されたのである。

◎指定の　たり　の活用は完了の　たり　に同じであるが、意味は全くちがふ。

九詠歎の助動詞

一〇希望の助動詞

一一比說の助動詞

詠歎の助動詞　次の例の　なり　けり　のやうに感動の意を示すものをいふ。

秋の野に人まつ蟲の聲すなり。（なり　なる　なれ）

あやしきものは心なりけり。（けり　ける　けれ）

◎指定の　なり　は動詞・形容詞の連體形又は名詞・代名詞から受け、詠歎の　なり　は動詞の終止形から受ける。

希望の助動詞　次の例の　たし　まほし　のやうに、動作を爲したいと望む意を示すものをいふ。

花見に行きたし。（たく　たし　たき　たけれ）

花見に行かまほし。（まほしく　まほし　まほしき　まほしけれ）

比說の助動詞　次の例の　ごとし　のやうに、事物を比較說明する意に用ひるものをいふ。

歳月は流るゝごとし。（ごとく　ごとし　ごとき）

◎ごとし　は、「風景畫圖のごとし。」「有れども無きがごとし。」のやうに助詞　の　が　にも連る。

練習

次の文から助動詞を擇び出し、且、その活用を示せ。

（イ）父は父たらずとも子は子たらざるべからず。

（ロ）光陰は矢のごとし。一度去りては復還らず。

（ハ）旅行したきは山々なれど、父の許し給はぬを如何にかせん。

（ニ）助けらるゝものならば、助けてやりたきものなり。

（ホ）天皇陛下には仁慈の御心に富ませられ、今回の風水害の慘狀を聞召していたく大御心を惱ましめたまひ、内帑の金を下して窮民を賑恤せさせらる。

（ヘ）人の子たらんものは、重盛のその父に對するがごとくあらまほしきものなり。

第十六章　口語助動詞の種類及び活用

口語の助動詞は、文語の助動詞に比べるとその種類がやゝ少い。

通常之を時・打消・推量・受身・可能・使役・尊敬・指定・希望の九種に分ける。

時の助動詞　過去及び完了を示す　た　だ　と未來を示す　う　ようとある。

（例）

昨日雪が降つた。（過去）（たら　て　た　たれ）

丁度風が靜まつた。（完了）（同上）

◎このたが、が行・な行・ば行・ま行の四段活用に續くときは、「急いだ」

口語時の助動詞

「死んだ」「飛んだ」「止んだ」のやうに、動詞の語尾は　い　又は　ん　の音便となり、た　は濁つて　だ　となる。

やがて雨が止まう。（未來）（活用せぬ）

もうぢきに空が霽れよう。（未來）（活用せぬ）

打消の助動詞　次の　ぬ　ない　なかつ　まい　のやうな語をいふ。

二口語打消の助動詞

風は吹かぬ。（ず　ぬ　ね）

風は吹かない。（なく　ない　なけれ）

風は吹かなかつた。（なから　なかつ）

風は吹くまい。（活用せぬ）

◎まい　は推量して打消す助動詞で、文語の　まじ　にあたる。

◎ぬ　は通例　ん　と發音し、從つて　ん　とも書く。

三口語推量の助動詞

推量の助動詞　次の　う　よう　らしい　のやうな語をいふ。

明日は多分雪が降らう。（活用せぬ）

今頃は定めしこちらの話をして居よう。（活用せぬ）

此の模樣では、雪が降るらしい。（らしく　らしい）

◎う　よう　は文語の　む　にあたり、らしい　は　らし　にあたる。

◎文語　けむ　の意は、口語では　たら　う　の二助動詞を連ねて之をあらはす。

四口語受身の助動詞

受身の助動詞　次の　れる　られる　のやうな語をいふ。

猫が犬に追はれる。（れ　れる　れゝ　れよ）

太郎が馬に蹴られる。（られ　られる　られゝ　られよ）

◎れる　は文語の　る　にあたり、られる　は　らる　にあたる。

五口語可能の助動詞

可能の助動詞　次の　れる　られる　のやうな語をいふ。

一日に十里は歩かれる。
君の球は私にも受けられる。
◎此の助動詞は、その形も活用も全く受身の助動詞と同じである。
◎可能の　れる　れ　は、四段活用動詞のと結びついて次の例のやうに約まることがある。
歩かれる……歩ける　讀まれた……讀めた

六口語使役の助動詞

使役の助動詞　次の　せる　させる　のやうな語をいふ。
左官に壁を塗らせる。
大工に家を建てさせる。
◎せる　は文語の　す　にあたり、させる　は　さす　にあたる。
◎させる　がさ行變格の　せ　につゞくときは、せ　と　さ　とが約まつて　させる　となる。

七口語尊敬の助動詞

かはゆい子には旅をさせる。

尊敬の助動詞　次の　れる　られる　のやうな語をいふ。
父上はよく字を書かれる。
先生は親切に生徒を教へられる。
◎れる　られる　の活用は受身の　れる　られる　と同じである。
◎られる　がさ行變格の　せ　につゞくときには、せ　と　ら　とが　さ　と約まりて、される　となる。
兄上は歯痛で困難される。

對話の助動詞

此の類の助動詞に　ます　がある。
私は本を讀みます。（ませ　まし　ます）（ますする）
この　ます　は動作の主に對する尊敬ではなくて、話の相手に對する敬意を示す。それゆゑ對話の助動詞といふ。

八口語指定の助動詞

九口語希望の助動詞

指定の助動詞　次の　だ　です　のやうな語をいふ。

私は彼を信じてゐるのだ。（だら　で　だつ　だ）
（です。（でせ　で　でし　です）

前途は有望だ。（同上）
です。（同上）

◎だ　を　ぢや　といふ地方もある。

◎です　は指定の對話語である。

希望の助動詞　次の　たい　たかつ　のやうな語をいふ。

良友を得たい。（たく　たい　たけれ）

結果を見たかつた。（たから　たかつ）

練習

次の文から助動詞を選び出し、且、その種類と活用とを示せ。

（イ）雨がやんだから散歩に出かけようと思つてゐた處だ。

（ロ）雨は降るであらう。しかし、風は吹くまい。

（ハ）言ひたいことは山々ですけれども、口不調法ですから、これで御免を蒙りませう。

（ニ）金剛石もみがかなければ、玉の光は添はないであらう。

（ホ）人をそしれば人にそしられ人を笑へば人に笑はれる。

（ヘ）長男は農學校を卒業して實業に就かせ次男は海軍兵學校に入れて海軍士官にしたい。

（ト）燈火を中心とした此の病床六尺の天地は、今は何物にも煩はされることのない極めて自由な希望に充ちた世界の樣に思はれた。

第十七章　助動詞の形

助動詞にもまた未然・連用・終止・連體・已然(假定)・命令の六形若しくはその中のいくつかの形がある。而してその活用の動詞に似たものは動詞に照して考へることが出來、形容詞に似たものは形容詞に照して考へることが出來る。今ぬ　たし　せる(ロ)の三助動詞について之を畧說しよう。

助動詞の形

花咲きなば、見にゆかむ。
花見に行きたくば、行け。
公園に行かせよう。(ロ)

未然形

右のな　たく　せ(ロ)は未然形である。

花咲きにけり。
花見に行きたく思ふ。
公園に行かせた。(ロ)

連用形

右のに　たく　せ(ロ)は連用形である。

花咲きぬ。
花見に行きたし。
公園に行かせる。(ロ)

終止形

右のぬ　たし　せる(ロ)は終止形である。

花の咲きぬる日。
花見に行きたき心地す。
公園に行かせる時。(ロ)

連體形

右のぬる　たき　せるは連體形である。

花咲きぬれば、見にゆきぬ。
花見に行きたければ、出て行きたり。
公園に行かせれば、喜ぶだらう。（ロ）

已然形
假定形

右のうち、文語ぬれ　たけれ　は已然形で、口語せれ（ロ）は假定形である。
花見に行きね。
公園に行かせよ。（ロ）

命令形

右のね　せよ（ロ）は命令形である。

◎形容詞に似た活用をなす助動詞には命令形はない。

なほ助動詞の各形については、別表を參照せよ。

練習

次の文から助動詞を擇び出し、且その種類及び形を示せ。

（イ）富士山へは一日にて登らる。
（ロ）暑氣にあてられて、病にかゝらせらる。
（ハ）雉子も鳴かずばうたるまじ。
（ニ）知らぬ事は知らずと答ふべし。
（ホ）櫻咲きなば、つれだちて向島に遊ばんと、友にいひやりたり。
（ヘ）せめては物を書き習はしめたくこそ侍れ。
（ト）過ぎたるはなほ及ばざるがごとし。
（チ）日本の國旗はどの點から見ましても申分のない徽章だと思ひます。どうか、此の國旗の精神を國民に普及させて、愛國心を鼓舞し、日章旗の名譽を益〻輝かしたいものであります。（ロ）

第十八章　副詞の用法

副詞は、動詞・形容詞に副うてその意味を限定する語であるが、時としては他の副詞に副うてその意味を限定することもある。

〔例〕

いと靜かに物語る。（いと　は副詞　靜かに　を限定してゐる。）

たいそうよく勵む。（イ）（たいそう　は副詞　よく　を限定してゐる。）

副詞は又、語を隔てゝ動詞・形容詞等の意味を限定することがある。

〔例〕

頗る山水の景に富めり。（頗る　は動詞　富めり　を限定してゐる。）

少しも怒り恨んでゐる樣子がない。（ロ）（少しも　は形容詞　ない　を限定してゐる。）

右の外、副詞は又、動詞・形容詞或は副詞の用を爲す語に副うてこれを限定することがある。

〔例〕

決して人を欺くべからず。（決して　は動詞の用をなす語　欺くべからず　を限定してゐる。）

たつた半日の道です。（ロ）（たつた　は形容詞の用をなす語、半日の　を限定してゐる。）

纔に十秒の差にて敗れたり。（纔に　は副詞の用をなす語　十秒の差にて　を限定してゐる。）

練習

次の文から副詞を擇び出し、且、その限定してゐる語を示せ。

（イ）日やがて暮れなんとするに、風益〻涼しく、氣愈〻淸し。

(ロ) 明治二十七八年の戰役正に終りて臺灣の地我が有に歸したれども、兇賊なほその地に據り、險を恃みて敢へて王師に抗せんとす。

(ハ) たま〳〵一方を突き破つて山頂に達したかと思へば、忽ち他の砲臺から十字火を浴せかけますので、迚も保ちきれません。(ロ)

(ニ) 恐る〳〵神前に進みて願はくは神慮を告げ給へと、しきりに額づきぬ。

(ホ) 我はしばらくこの地を去らんとして、かつて我が友よりあづかりたりし行李を更に伯父なる人に預けたり。

(ヘ) ほと〳〵と折々たゝく水鷄の聲いとあはれに聞ゆ。

(ト) 明日ぜひおめにかゝりたい事がございますから、どうぞ御在宅下さいますやう〳〵もゝ願ひ申します。(ロ)

(チ) つと汲まれたる山櫻、たゞ白妙に一めぐりめぐると見ればうち

つゞきのぼる椿のくれなゐや。

(リ) もう網の中はさつきから鰺や鯖の青光り白光りがばた〳〵はねてゐます。いやもう盛なことです。(ロ)

第十九章　接續詞の種類及び用法

接續詞はその意味の上から、之を次の四つに分ける。

並列・累加の接續詞

又　且　尙　及び　況や　まして（以上、文ロ）　その上　さうして　て　そして　それに　それから（以上ロ）　など。

◎又　尙　は副詞の接續詞に轉じたもの、及び　は動詞の接續詞に轉じたものである。

並列・累加の接續詞

二選擇の接續詞

三反意の接續詞

四原因・理由の接續詞

選擇の接續詞

又は　或は　若しくは（以上、文口）　それとも（口）　など。

反意の接續詞

されども　然れども（以上、文）　但し　併し　尤も　處　しかし。

ながら　さりながら（以上、文口）　けれども　それですが（略して、で）

すが）　それですけれども（略して、ですけれども）　それでも（略して、

でも）　ところが（以上、口）　など。

◎處　は名詞が接續詞に轉じたものである。

原因・理由の接續詞

然れば　然らば　されば　さらば　故に　隨ひて　因りて

間（以上、文）　それですから（略して、ですから）　それゆゑ　それで（略

して、で）　それでは（略して、では）　それなら　さうすると（略して、す

ると）　さうしたら（略して、したら）　そこで（以上、口）　など。

◎間　は名詞が接續詞に轉じたものである。

練習

次の文から接續詞を擇び出せ。

（イ）明日、南又は東の風。但し驟雨の兆あり。

（ロ）御主人並に奥樣とも御不在とや。然らば、明日參邸せん。

（ハ）昨日はひどい嵐であつた。それゆゑ、外出を見合せた。（口）

（ニ）人に對してものいふに、敬語を缺くは、傲慢にして厭ふべく、或は

野鄙にして笑ふべきものなり。されど、あまりに度を過ぎたる

敬語を用ふるも亦よろしからず。

次の――の處に適當な接續詞を補へ。

（イ）米・麥・豆・粟――黍を五穀といふ。

（ロ）秋になりぬ。――殘暑未だ去らず。

(ハ) 余は學問―藝術にて身を立てんと欲す。
(ニ) あの人は善人です。―學問はあまりありません。(ロ)
(ホ) 人の一生は長からざるにあらず。―その運命は少年時代の勤惰によりて定まる。
(ヘ) 徳川光圀は地の利をつくす術に心を用ひ、山に漆―楮を多く植ゑ、野に馬を放ちて牧となせり。―海には海草・白魚―昆布をまき、―蛤を放てり。これより常陸の地に多くの海産物出づるに至れり。

第二十章　感動詞の種類及び用法

感動詞には、「あゝ悲し。」の　あゝ　のやうに、文の首に附くもの

一 文の首につく感動詞

と、「美なるかな。」の　かな　のやうに、文の末に附くものとある。

文の首につくもの

あゝ　あな　あはれ　いざ　いで　すは　やよ(以上、文)　あら
あれ　いゝえ　いえ　えゝ　おい　おゝ　おや　こら　これ
さあ　さて　そら　それ　どれ　なに　なあに　はい　まあ
やあ　やれ(以上、口)　など。

二 文の末につく感動詞

文の末につくもの

や　あな、かなしや。
よ　すは、火事よ。
は　吾妻はや。
も　あはれ、かなしも。
な　わが身悲しな。

かな　賢なるかな。

かも　かなしきかも。

がな　わかれのなくもがな。

ばや　花見に行かばや。

かし　勉強せよかし。（以上、文）

よ　そら大變ですよ。

な　まあ、奇麗ですな。

ぬ　ようお出で下さいましたね。

ぜ　なまけてばかりゐてはこまりますぜ。

ぞ　そんなことではいけませんぞ。（以上、口）

右の外、此の類に屬するものは、少くない。

練習

次の文から感動詞を擇び出せ。

（イ）あはれ、今年もつひにくれぬるかな。

（ロ）かんざしよ櫛よさて世は暑いこと。

（ハ）おや、懷中時計が五分進んでゐるぞ。（ロ）

（ニ）さて〳〵こまつたことになつた。こりやまあどうしたらよからう。（ロ）

（ホ）あなおもしろの春雨や。

（ヘ）やあ、久しくあはなかつたね。（ロ）

（ト）あはれ、手の中の玉よとめでいつくしめる子をうしなひし母の心はよ。

（チ）やよや、待て、山ほとゝぎすことづてん、われ世の中にすみわびぬとよ。

第二十一章　助詞の種類及び用法

助詞はその添はる語の種類によつて、次の三類に分ける。

一體言に添はる助詞

名詞・代名詞に添はる助詞

兄の帽子。　米のなる木。　我が庭。
花を觀る。　山に登る。　前へ進め。
火と水と。　友人と遊ぶ。　歐洲より歸る。
花より團子。　神戸まで見送る。
の　の　が　を　に　へ　と　より　まで　などである。而して前の　の　は所有の關係を示し、後の　の　は動作・情態の主を示し、が　は所有の關係を示し、を　は動作の目的を示し、に

は場所を示し、へ　は方向を示し、前の　と　は事物の並列を示し、後の　と　は共同の意を示し、前の　より　は起點を示し、後の　より　は比較の標準を示し、まで　は到着點を示す。口語では、起點を示す文語の　より　は　から　となり、方便を示す　にて（熟語）　は　で　となる。並列を示す　と　は最後の一を省く。

二種々の語に添はる助詞

種々の語に添はる助詞

支那から歸る。　ペンで書く。　火と水と金。

墨は黑し。　行をば愼む。
學も徳も高し。　月を（ぞ／なむ）愛づる。
月をこそ愛づれ。　必ずしも然らず。

ありや、なしや。　あるか、なきか。

水だにあらば、よかりしを。　禽獸すら恩を知る。

暴風さへ加はる。　粥のみ／ばかり　すゝる

泣くな、笑ふな。　な泣きそ、な笑ひそ。

のはばも　ぞ　なむ　こそ　し　や　か　だに　すら

さへ　のみ　ばかり　な　な……そ　などである。而して、は

ば　は特にある事物をひき出していふに用ひ、も　は事物の一

致をいふに用ひ、ぞ　なむ　こそ　し　は特に上の語をさして

いふに用ひ、や　か　は疑ひ又は問ふ意に用ひ、だに　すら

は輕きを示して重きを言外に悟らしめる意に用ひ、さへ　は、あ

るが上になほ物の添ひ加はる意に用ひ、のみ　ばかり　はそれ

と限る意に用ひ、な　な……そ　は禁止の意に用ひる。

文語の　や　は、口語では、か　となり、だに　は　でも　となり、すら　は　さへ　となり、さへ　は　まで　となり、な……そ　は　な　となり、のみ　は　ばかり　となる。

〔例〕

あるか、ないか。

水でもあれば、よかったに。

禽獸でさへ恩を知つてゐる。

暴風までが加はる。

粥ばかりすゝる。

わきみをするな。

◎は　ば　も　か　等は、口語と文語と同じである。

◎ぞ　なむ　し　は之に相當する口語がない　但し　こそ　は稀に口語にも用ひられる。

◎なむ　は　なん　と發音し、從つて　なん　と書く。

動詞・形容詞・助動詞に添はる助詞

三活用する語に添はる助詞

乞はば與へん。

乞へば與ふ。

乞へど／ども　與へず。

乞ふとも與へじ。

梅は咲ける／に／を　鶯は未だ來鳴かず。

雪は降りしが、風は吹かざりき。

歩み／つゝ／ながら　語る。

何事をもなさで日を暮す。

のば　ど　ども　とも　に　を　が　つゝ　ながら　で　なども　は假定の條件、後の　ば　は確定の條件である。而して前の　ば　は假定の條件、ど　ども　は確定の條件、共に順當な接續の意を示し、とも　は假定の條件で、共に不順當な接續の意を示し、に　を　が　は反對になる意を示し、つゝ　ながら　は動作の同時に起ることを示し、で　は打消の意を示す。

以上文語の助詞の中、確定の　ば　は、口語では　ので　から　となり、假定の　とも　は　ても　となり、を　は　に　となり、つゝ　は　ながら　となり、で　は　ないで　又は　ずに　と

なる。

〔例〕

乞ふ（ので／から）與へる。

乞うても與へまい。

梅は咲いてゐるのに、鶯はまだ來て鳴かぬ。

あるきながら語る。

何事をも（しないで／せずに）日を暮す。

此の他は概ね口語と文語とに（　）してある。

練習

次の文に含まれてゐる助詞を示せ。

（イ）庭の雪は犬の足跡より消えそめて、野も山もやがて元の姿となる。

（ロ）兎を搏つにも全力を用ふ。

（ハ）君が代は千代に八千代に、さゞれ石のいはほとなりてこけのむすまで。

（ニ）急がずばぬれざらましを、旅人のあとより霽るゝ野路の村雨。

（ホ）かくあつてこそ勞働は誠に神聖である。われらの如き門外漢にまで、そゞろにその境遇がうらやまれる。（ロ）

次の○○の處に適當な助詞を補へ。

（イ）勤○儉○○家○興す基なり。

（ロ）良藥○口○苦けれ○○病○利あり。

（ハ）孟子○母○孟子○教育するため○三たびその居○移したり○いふ。孟子○、他日大儒○なりし○、全く母○教育○よかりしによれり。

(ニ)念力岩○○透す○いふ諺○如く、勉强○○すれ○、どんな事○○出來ぬ○いふ事○ない。(ロ)

(ホ)目○前○不用なり○○妄に物○捨つべからず。諺に「禍○三年立て○用○なす。」○○○言ふ○あらず○。

(ヘ)不自由○常○思へ○不足なし。心に望おこら○、困窮したる時○思ひ出すべし。堪忍○無事長久○基、怒○敵○思へ。勝つことばかり○知つ○負くること○知らざれ○、害其○身○いたる。

中學日本文典　卷上　終

文部省檢定濟
大正十二年十一月十六日　中學校漢文科教科書

明治四十四年十二月廿四日印刷
明治四十四年十二月廿七日發行
明治四十五年三月十三日訂正再版印刷
大正四年十月二十八日修正三版發行
大正四年十一月三十一日修正三版發行
大正十二年十一月十一日修正七版印刷
大正十二年十一月十四日修正七版發行
大正五年一月十日修正四版印刷
大正六年十一月廿七日修正五版印刷
大正七年一月二十日修正五版發行
大正七年一月五日修正六版印刷
大正七年一月五日修正六版發行

著作權所有

著作者　東京市小石川區高田老松町五十二番地　吉田彌平
發行者　東京市神田區通神保町六番地　上原才一郎
發行所　東京市神田區通神保町六番地　光風館書店（電話大手七三四〇番）（振替口座東京三二七番）
印刷者　東京市神田區通神保町六番地　四海民藏

定價　各金二拾九錢
大正十四年度臨時定價　各金五拾二錢

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附可致候

中學日本文典　上

東京秀英舍第一工場印刷

文庫
23
419
広島大学図書
2000026419